11/21(水) 毎日新聞

〔第3種郵便物認可〕

目指せ！ 世界ジオパーク

隠岐魅力UP

島根

すっきり ワイドに きょう3ページ

移住者が多いことで知られる海士(中ノ島)ですが、最も有名な移住者は後鳥羽天皇です。平安末期から鎌倉初期の第82代天皇で、承久3（1221）年、鎌倉幕府の倒幕を狙って挙兵するも失敗。隠岐へ配流となり、以後19年を海士で暮らして生涯を終えました。

このような高貴な方の来島は一大事であり、院にまつわる史跡や逸話が数多く残されています。今も耳にする「ごとばんさん」（後鳥羽院さま)という呼び名。現在は院その人のことを指しますが、以前は違いました。「隠岐の後鳥羽院抄」（田邑二枝著、昭和46年発行）によると、島民は昭和初期、御火葬塚（埋葬地）や源福寺(住んでいた場所)の跡あたり一円のことを「ごとばんさん」と呼び崇敬していました。そしてちょうどその地に昭和14（1939)年創建されたのが、院を祭神とする隠岐神社です。

海士北部の低い平地は島前随一の稲作地帯で水源も豊か。それゆえ、そこに位置する源福寺が行在所に選ばれたと思われます。その平地は約280万年前に、明屋海岸の噴火で噴き出た溶岩が入り江をせき止め土砂が堆積してできたもの。壮大な時間軸の大地の成り立ちのドラマが歴史の舞台を用意しておいてくれた…と言えるかも。

後鳥羽院の「遠島百首」

「遠島百首」のかるた（1セット5千円で販売中）
＝著者撮影

さて後鳥羽院は、書や管絃、囲碁、蹴鞠、水練、流鏑馬にも優れた多趣味多芸&文武両道な方ですが、特に活躍したのは和歌で、史上有数の歌人です。隠岐で詠んだ歌も多く、歌集「遠島百首」の97番には有名な

我こそは　新島守よ
隠岐の海の　あらき浪風
心して吹け

もあります。この歌集は「春」「夏」「秋」「冬」と「雑」の5部構成で、都への思いや孤独を切々と詠じた歌が大半ですが、約800年前の天皇が見た島の四季のスケッチだと思って味わうと趣深いものです。また76番の

波間ゆく　隠岐の湊に
行く舟の　我そこがるる
たえぬ思ひに

では、本土と往復する船が行き交う様子をおそらく木路ケ崎（中ノ島南端）から見下ろして、望郷の念を深めているのでしょう。とすると院の眼前は島前カルデラ。約600万年前の島前火山の噴火で陥没したカルデラの中央で、焼火山（西ノ島）が再噴火して中央火砕丘を形成し、それを囲むように広がった内海です。

圧倒的な隠岐の自然に抱かれる島人、海を眺め心を震わせる島人としては、現代の私も鎌倉時代の後鳥羽院も一緒。そう考えると島民であることが何だか誇らしく、風土へのいとおしさも増す気がします。

（海士町役場総務課情報政策係　岡本真里栄）